

ヤーノシュ・シュタルケル マスタークラス開催！

去る9月23日、秋晴れの爽やかな天候のもと、シュタルケル氏のマスタークラスが行われました。今回は、(財)日本音楽財団の助成と、会場となったトッパンホールのご協力を得て、チェロ協会との共催で実施となりました。

シュタルケル氏は前日の午後に米国から到着し、翌日の昼にはマスタークラスというスケジュールにもかかわらず、疲れた様子も見せず指導にあたられました。

当日の受講生と曲目は次のとおりです。

宮田大 カバレフスキー：チェロ協奏曲 ト短調 op.49から 第3楽章

芝村崇 コダーイ：無伴奏チェロ・

ソナタ op.8 から 第1楽章

植木昭雄 バッハ：無伴奏チェロ組曲

第2番 二短調 BWV.1008

最初に、マスタークラスでは受講者へのアドバイスというよりも、会場の皆さんの参考になるような、作品を作っていく上でのアイデアを話したい、と述べられました。

以下にシュタルケル氏のコメントを要約致します。

カバレフスキー チェロ協奏曲 第3楽章

よく音楽家は曲の速さについて議論するが、遅すぎるのは音楽が退屈に聞こえる時、早すぎるのは全ての音がちゃんと聞こえない時である。最後のテンポの部分、16分音符を早いパッセージで弾く時には、弓を弦につけ



たままでなく、弓が弦からスピッカートの的に自然に跳ねるように。この際、手を動かすのではなく、力を抜いて腕を振った時の感じで。基本的にスピッカートはレガートと同じボウイング。レガートからスピッカートは生まれる。形としては、いつも上腕をちょっと上げて、肘からぶら下がるような形をとり、肩から支えている感じで、でも肩の力は抜き、肘から先を動かす。手を動かすのではなく、肘の動きによって先にぶら下がっている手がついてくるように。

まず曲のキャラクターをつかむこと。この曲は上品な舞曲である。なおかつユーモラスな感じで弾いて。

出だし部分、ダウンビート(強拍)の時、頭は下がらなくてはならない。弾く瞬間に頭が上がっており、身体と音楽の強拍・弱拍がかみあっていない。アップの時に身体が丸まっている為そのような癖がついたと考えられる。(ヴァイオリニスト・ピアニストにも同じようにしてしまう例がある)沈んでいるとダウンを弾く時に身体のコントロールがきかなくなるため、その結果、音楽



に関係のないアクセント（身体が沈んでしまうので、次のダウンが早くなりすぎてしまう等）がついてくるようになってしまう。弓を引き始める時に、その先どのような配分で弓を使うか計画すること。

左手について。親指に力をいれすぎるとネックを握ってしまうことになり、ポジショニングがうまくいかない。親指を、押さえている他の指とつながって一体となるように感じる。ポジションチェンジの時の親指も力を抜く。弾く = PLAY。WORKではないので、一生懸命弾いているのが見えるのが良い時もあるが、決して格闘はしないように。

歌の部分について。ポルタメントをつけすぎないように、フレーズを考えて、弓の配分を考える。カンタンドの意味のとおり、たっぷりと歌う。

終わりの部分について。全部の音がちゃんと聞こえて、初めてヴィルトゥオーゾに聞こえる。一小節は何拍か？一小節一拍のように弾いているが、二拍なのだから必ず二拍で感じて弾くこと。指先の力を抜いて弓をはねさせる。弓のバランスポイントで練習してみる。最初はゆっくりなるべく大袈裟に弓を感じながら、だんだん早くして弓を少しにしていくとはねるようになる。このボウイングを身につければもっと明確に弾けるようになる。

コダーイ 無伴奏チェロ・ソナタ 第1楽章

弾いている時の座り方のバランスは大事である。一番基本的な姿勢は、左足を前に出してかかとに重さを置く。右足は椅子の足より後ろに下げる（外側もしくは内側でもよい）。左かかと・右つま先・腰の三角形で身体を

支える。どのくらい深く座るかは、足を動かさずに椅子から立てるかどうかを目安にする。足は必ず開いていること。閉じていると楽器の裏板に触り、音がこもって止まってしまう。

正しい場所が見つかったら、膝で楽器をコントロールできるように。例えば、C線を引く時にはC線がよく鳴るように身体を傾ける。演奏中ポジションが変わらなかったが、特に2楽章はCが自由に反応するように弦を振動させる。

ボウイングのピブラートはずっと押さえているのではなく、重さをのせて、軽くして、またのせて、の繰り返し。一つの作品の中で、テンションは高くなる時もあるればゆるむ時もある。テンションの揺れは右手も左手にも共通して言えること。一回弦を鳴らしたら押さえているのではなく、力を抜くように。

左手の各ポジションのつかみ方を把握していないのは、音程が不安定になる要素である。

調弦について。開放弦だけで調弦すると倍音まで調弦できない。D線のFisのハーモニッククラジオを使って調弦すると、開放弦まで和音を弾いた時でも倍音まできれいに鳴る。

一楽章はファンタジアのように自由だが、その中でも守らなければいけないことがある。

コダーイが指定している音形はルパートをしていてもちゃんとわかるように弾くこと。例えば一つの音をルパート的にのばしたら、その次の音も少し長めにしておく。次の音で、もとのテンポに戻してしまうと、音形が崩れてしまう。

カウンタープレッシャーを利用した弾き方について。D線を開放弦でゆっくり弾き、ボウイングの途中に弓が真ん中まできたら、大きなクレッシェンドで弾いてみる。

この動作の時、弓が真ん中まできたら、左の膝で弓に対して楽器をおこすとよい。C線の場合は右膝を使って楽器をおこす。

2楽章の長い音は、音を伸ばしている間に必ず拍数を感じることに。

コダーイのポンティチェロは他の作曲家のポンティチェロとは違う。背筋が寒くなるような音というよりは、むしろ遠くから静かに聞こえるような音がほしい。

左指先が固くなっているが押さえすぎないこと。3ポジションの時は、使っている指以外は力が抜けているように。また、次のポジションに飛びつくのではなく動きの中にリズムや方向性を感じて動いて欲しい。音から音に飛ぶのではなく、そのフレーズのキャラクターにそった動きができるように。

ハイポジションの親指の置き方について

親指を2弦の上に5度をひく状態で置き、他の指を並べるやり方。そうすると、常に指は同じ角度で指板を上がっていけることになる。音程も正確になり、ピブラートも安定したものがかかる。

親指のサポートを使わないやり方。それぞれの指の角度が自由になり、ピブラートの種類も変えることができる。となりの弦の振動を止めないので、弾いている時にも隣の倍音も使うことになり、さらに豊かな響きをつくることができる。

、の両方のアプローチのよい点をとった方法で、チェロの中心から上に来た時には、親指を指板の下においてみるやり方。指板の下に親指を入れることによって、サポートも得られるし、隣の弦の倍音を止めることもない。親指が必要になったら、上に上げればよい。

バッハ 無伴奏チェロ組曲 第2番

それぞれの楽章では和声進行が基本なのか、メロディを中心に考えなければいけないのかを判断しなければならない。

プレリュードは基本的に3度の音の進行。16分音符になっても3度の和音の構造が中に隠れている。この進行によって音楽やフレーズの方向性がでてくる。

アルマンドでいつも問題になるのは、冥想的な曲なのか舞曲なのかがハッキリしていないこと。両方の要素が表れている以上、それを理解して弾くこと。瞑想的な部分は立ち止まって欲しいし、舞曲的な部分はリズムを強調してほしい。

長い音を弾く時には、拍感を忘れずに。

音楽の中に、なるべくしてなったというものが見えてこないといけな。色々な人の演奏があると思うが、

なぜそうなったのかがわかる演奏をして欲しい。それを決める一つの方向がリズムである。拍を感じて弾くと、次のどの音につながり、1つのつながりとしてどこに向かって行くのかが明確にわかる。

クーラントについて。ダウンボウとアップボウの音出しは必ず同じになるように。弓を動かすのに、縦の動きが混じってはいけない。肘を使うことによって、弓先でもノンレガートのボウイングになる。

ジークはリズムがはっきり、常にコンスタントな形で表れるように。

また、身体と音楽のダウンビートがあっていない。アウフタクトは音になっていないダウンビートの裏返しであるのを忘れないように。いつも同じように拍をとるのではなく、感じを常に変えていく。16分音符6つのところは、細かいユニットで感じると発音もはっきりする。ボウイングだけでなく、左指も一つ一つ持ち上げると発音がクリアになる。



関西チェロサロン



「関西チェロサロン」感想

井上 俊彦 (一般参加)

「チェロの夕べ」を終わって出演者全員で懇親会の食事をしながら、ふと「これは何かに似ている。いやそっくりだ。」と思った。「料理教室」。そう、まさしくそれだ。しかも超高級な料理教室。極上の食材とレシピ(楽譜)超一流のシェフの先生(林先生)先生が少人数の生徒をキメ細かく指導し、出来上がった料理をみんなで試食、お客も舌鼓を打ちおかわりも(アンコール)。この日の呼び物はシェフの先生の特別アラカルトの三品(ソロ)。期待通りこれはまさしく絶品!! 会場は感嘆のため息で溢れた。

料理教室に行った経験はないが、テレビ等で見聞したものと、この夜のイベントはイメージがダブって見えた。

ところで何と言ってもこの日のポイントは、林先生のレッスンだった。生徒のレベルに合わせ、時にはその場でのアレンジも加えながら、終始クリエイティブでユーモアにとんだ林先生の素晴らしいレッスン。先生の一言一句がどの曲にも新しい息吹を与え、輝き始める。全員が吸い込まれるように先生のトークに神経を集中させ、練習に酔った。

この夜仕上がった音楽はまさしくこの時だけのオリジナルサウンドに間違いなく、音楽って、チェロって何と不思議で神秘的なんだろうと改めて感じさせられた。

また近い将来、出来れば当夜のように「大吟醸」つきでこんな企画をおねがいしたいものです。

チェロサロン in 西宮に参加して

永山 恭子 (R-173)

『アマチュアにも夢でない美しいチェロの音色』の秘訣、その言葉に惹かれて西宮での関西チェロサロンに参

加させていただきました。

ほとんどの方が耳にしたり演奏されたことのある曲でまとめられていましたが、顔ぶれや人数が違うとまた違う響きに聴こえ、とても新鮮な気持ちでチェロサロンは始まりました。

ご指導下さった林先生は、アンサンブルの中での低音の重要性を何度もおっしゃって、メロディーとバスのバランスを中心に、何気なく弾いてしまいがちな音にも注意をはらわれ、アンサンブルという集団での音づくりで、ひとりの音が増えても欠けても違う響きとなることをその場で試して下さいました。それによって、重なっていく他のパートもその音にのりやすく、響きがよくなっていくことを実感することができました。

その後、林先生の演奏で、ピアニストの森下智子さんとの『白鳥』、ソロで『ロンドンデリー』等を聴かせていただき、その甘い音色と、繊細なヴィブラートに皆が陶醉していました。今回は、2時間でのチェロサロンの後、30分ほどお客さまに聴いていただいて、サロンコンサート風の成果発表という形式でしたので、時間が足りないように思えましたが、充実したひとときでした。

終了後の懇親会は、場所を提供していただいた日本盛さんの中で行われ、美味しい日本酒にほろ酔いながら、林先生がチェロクリニックのような話をして下さり、ここでもまた贅沢な時間。他ではなかなかお聞きすることのできない貴重なアドバイスに、メモをあわてて探すというひとこまもありました。その場でもいろんな意見が出たのですが、またいつの日か、このような機会を設けていただき、ワンポイントレッスンなどをご指導いただきながら、アンサンブルの楽しさをもっと知り、レベルアップにもつながるように、これからの地方チェロサロンにも期待したいと思います。

ご指導いただきました林先生、どうもありがとうございました。

『夢でない美しい音色』に、ほんの少し近づいたような、そんな心の暖まる関西チェロサロンでした。



新しい発見

岩崎 洸

旧友のヴァイオリニスト、セルジュ・ルカ氏がディレクターを務めるヒューストンの室内楽シリーズ及び、オレゴン州のキャストイド音楽祭には独特の音楽作りがあり、私はそこで演奏する度に新鮮な気分になります。独特の音楽作りと述べましたが、それは作曲家が聴こうしていた音色、曲想にいかにも近づけるかという事です。コンサートの曲目は、古典派から後期ロマン派までさまざまに一般の聴衆が喜ぶ名曲が多いのですが、それらの曲を実際に作曲された当時の楽器で弾いてみようというのが焦点です。今、ブームでもあるバロックアンサンブルの分野では古楽器を使うコンサートが多いのですが、ロマン派の曲は大抵現代の楽器で演奏されています。

プログラムには、ブラームスのピアノ五重奏曲がありました。弦楽器奏者は1800年代の楽器の音を出す為に皆それぞれの楽器に4本のガット弦を使うことになり、私もA線とD線にプレーンガット、G線とC線にはオリーブを張りました。弓は普通のものを使い、ガット弦に慣れるまではどこか力が弱く反応が無く感じましたが、楽器が鳴り出してくるとガット弦の暖かく美しい音に魅了され、さらに四人の弦楽器が合わさると実によく調和した響きになるのです。この曲でのピアノは1852年製のベーゼンドルファーが使われました。全くの骨董品ですが、オランダのエドウィン・ビュンク氏の手によってコンサート用に完全に修理・復元された物で、音量は決して大きくなく、響きも短め、ペダルの利き方もとても少なく、現代のピアノしか弾いたことの無い人にとってはショッキングな音だと思います。でもこれがブラームスの時代にあったピアノなのです。さて、合奏になってみると、今まで何十回と弾いたことのあるこの曲が全く新しい曲に感じました。普通はピアノの音で消されて聞こえないはずの弦の内声部が不気味に美しく聞こえ、又、ピアニストに対して「もっと低音を強く弾いて下さい」などと普通のピアノとの合奏では考えられないような要求が起きました。例えば第三章、スケルツォのフォルティシモの部分は、五人が思い切り弾いてもピアノと弦楽器がバランスよく響きあいました。

この他にも色々な曲を経験しました。シューベルトのピアノ五重奏「鱒」の時は1840年製のベーゼンドルファーのピアノを使いましたが、ピアノの低音がコントラバスのピツィカートと同じ様な響きを出し、旋律部分もまるで弦楽器の様な音色で、本当に美しい響きの合奏になりました。ショパンのチェロソナタはピアノパートに多くの音符が書かれているので、チェロの音はピアノに押されてしまう部分が多いのですが、フランスのエラルド、1845年製のピアノと合わせた時は全曲通して自分の音がよく聞こえ、ピアノとチェロが同等に語り合う本当の意味の「ソナタ」を楽しみました。又、ウェバーのフルート・チェロ・ピアノの為の三重奏曲では、1810年製のローゼンベルガーのピアノ、そしてフルートも木製の笛が使われました。

楽器や弦を選ぶことによってその作品の真の姿に近づいたような新しい発見ですが、この経験や音のイメージがあることによって、これらの曲を現代の楽器で演奏する時も曲に対するアプローチが広がっていくでしょう。

情報コーナー

- 第2回泉の森ジュニアチェロコンクール
2002年5月4日(土)～5月5日(日)
泉佐野市立文化会館(泉の森ホール)小ホール
参加料:15,000円
受付:2002年2月1日(金)～2002年3月15日(金)
お問合せ:泉の森ホール 0724-69-7105
- 「水戸芸術館 ニューイヤーコンサート2002」
2002年1月6日(日) 16:00開演 水戸芸術館(茨城)
出演:堀了介/松波恵子(Vc)、他
お問合せ:水戸芸術館 029-231-8000
- 「WE LOVE NEW YORK」
2002年1月11日(金) 19:00開演 サントリーホール(東京)
出演:岩崎洗/堀了介(Vc)、他
お問合せ:IMG東京 03-3403-9003
- 「東京フィルハーモニー交響楽団 第654回定期演奏会」
2002年1月24日(木)19:00開演 オーチャードホール(東京)
1月25日(金)19:00開演 サントリーホール(東京)
出演:チョン・ミョンフン(Cd)/ジャン・ワン(Vc) 他
お問合せ:新星東京フィル 03-5353-9522
- 「デュオハヤシのとおき室内楽Ⅲ」
2002年1月27日(日)15:00開演
代官山ヒルサイド・プラザ・ホール(東京)
出演:林俊昭(Vc)/林由香子(Pf)
お問合せ:鶴エンタープライズ 03-3770-6891
- 「東京都交響楽団 第545回定期演奏会」
2002年2月22日(金) 19:00開演 東京文化会館(東京)
出演:ローレンス・フォスター(Cd)/田中雅弘(Vc) 他
お問合せ:都響ガイド 03-3822-0727
- 「クレメンス・ハーゲン(Vc)&アレクサンドル・メルニコフ(Pf)」
2002年3月21日(木・祝) 14:00開演 カザルスホール(東京)
お問合せ:ジャパン・アーツ 03-3499-9990

<2002年来日予定>

3月	クレメンス・ハーゲン(Vc)&アレクサンドル・メルニコフ(P)	ジャパン・アーツ 03-3499-9990
	チョー・ヨンチャン	
	神奈川フィルハーモニー管弦楽団	045-331-6699
4月	クイリン・ヴィルゼン	梶本音楽事務所 03-3289-9999
	ルイジ・ピオヴァーノ	ムジークレーベン 03-5458-7777
	アンリ・ドゥ・マルケット	
	コンツェルト・ハウス・ジャパン	03-3538-8188
5月	エリザベータ・スーシェンコ	ムジークレーベン 03-5458-7777
	ヨーヨー・マ(Vc)&マーク・モリス ダンス・グループ	
	ミュージック・プラント	03-3466-2258
6月	チョン・トリオ	アスペン 03-5467-0081
	ヤナ・ボウシュコヴァ(Hp)&イジー・クビータ(P)	
	&フランティシク・ホスト(Vc)	
	ムジークレーベン	03-5458-7777
	ミッシェル・マイスキー	アスペン 03-5467-0081
7月	ベルリン・フィル12人のチェリストたち	
	ノア・コーボレーション	03-5386-9999
	マリオ・ブルネロ(Vc)&ヴァレリー・アフアナシエズ(P)	
	アリオ音楽財団	03-3400-5052
8月	ルイス・クラレット	梶本音楽事務所 03-3289-9999
9月	アレクサンドル・クニャーゼフ	
	テレビマンユニオン	03-5478-7617
	ミッシェル・マイスキー	アスペン 03-5467-0081
10月	アンヌ・ガスティネル	プロアルテムジク 03-3943-6677
	アンナー・ビルスマ	東京アーティスト 03-3440-7571
11月	ヨヨー・マ	ミュージックプラント 03-3466-2258
	ダニエル・ミュラー=ショット	
	ザックコーボレーション	03-5414-2285
12月	ピーター・ウィスベルウエイ	日本フィル 03-5378-6311
	デニス・シャボヴァーロフ	オレンジノート 045-545-4316
	チョン・ミョンファ	アスペン 03-5467-0081

チェリスト募集中!

「日韓親善チェロコンサート ～チェロの風を世界へ～」
2002年3月10日(日)14:00開演
神奈川県民ホール(横浜公演)
4月14日(日)17:00開演
ソウル世宗文化会館(ソウル公演)
指揮:山本祐介(横浜公演)
Na Duk-Sung(ソウル公演)
主催:国際チェロアンサンブル協会
上記公演で、チェロを演奏される方を募集しています。
詳細はホームページにて確認できます。
→ <http://kobe-cello.com>
info@kobe-cello.com
実行委員長 沖正哉 045-491-9881

事務局より

いつもお願いですが、会費のご入金がまだお済みでない方は、早急に手続きをお願いいたします。年が明けて4月には次年度の更新が入ります。お急ぎ下さい。

【お振り込み先】

富士銀行 神谷町支店 普通 2712673
三井住友銀行 赤坂支店 普通 7909038

口座名義「日本チェロ協会」

銀行からご入金を頂いた方は、振込み控えが領収書の代わりとなりますので大事に保管ください。現金にてお納め頂いた方は、事務局より領収書を送付致します。

お振込みはご登録いただいているお名前をお願いいたします。

JCSニュース 次号発行 スケジュール

原稿締め 2月28日 発送 3月31日

コンサートのちらし等の同送をご希望の方は3月15日までに事務局宛にお送りください。

編集後記

先日のマスタークラスでは、同時多発テロの影響でシュタルケル先生の来日が一時危ぶまれました。幸いにも航空便が再開され、また先生に来日のご意志があったためにマスタークラスを実施することができましたが、テロに続いての軍事報復のニュースに、人間はあまり進歩していないのかもしれないと悲しい気持ちになった方は少なくないと思います。この事件はもとより、今回被害に遭われたすべての方々とそのご家族のことを考えると心が痛みます。カザルスが望んだような争いのない世の中になる日はいつのことでしょうか。家族や親しい人たちと新しい年を迎えることのできるありがたいみをかみしめつつ、来年はもっと明るい年になることを切に願ってやみません。

日本チェロ協会会報 (JCS NEWS) 第13号

2001年12月31日発行

発行:日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人:堤剛

編集:日本チェロ協会事務局

編集協力:リュウカンパニー